

中等教育研究開発室年報 第33号（2020年3月31日発行）別冊電子版  
2019年度 授業実践事例

保健体育科 中学校第1学年

サッカー

授業者 世羅 晶子

（教育研究大会 公開授業）

広島大学附属中・高等学校



## 中学校 保健体育科 学習指導案

指導者 世羅 晶子

- 日時** 令和元年 11 月 29 日 (金) 第 3 限 11:40~12:30
- 場所** グラウンド (雨天時は体育館)
- 学年・組** 中学校 1 年女子 30 人 (A・B・C 組各 10 人)
- 単元** サッカー
- 目標**
1. サッカーの特性を理解するとともに、基本的な個人的技能や集団的技能を習得し、ゲームの中で活かすことができる。(運動の技能)
  2. 個人やグループの課題を的確に分析し、課題解決に向けて工夫することができる。  
(運動についての思考・判断)
  3. 安全に留意しながら、協力して活動することができる。(運動への意欲・関心・態度)

### 指導計画 (全 12 時間)

- |     |                      |                |
|-----|----------------------|----------------|
| 第一次 | オリエンテーション            | 1 時間           |
| 第二次 | 個人的技能の習得を図る          | 4 時間           |
| 第三次 | 個人的技能の向上・集団的技能の習得を図る | 7 時間 (本時 8/12) |

### 授業について

ゴール型ゲームはドリブルやパスなどのボール操作で相手コートに侵入し、シュートを狙い、一定の時間内に相手チームより多くの得点を競い合うことに楽しさや喜びを味わうことができる。

サッカーの中心的な面白さは、ゲーム中にできるようになったボール操作を使って、シュートを決めたり、グループ戦術を活かしチームで貢献できたりすることだと考える。

中学校女子にとってサッカーのボール操作の習得は容易ではなく、ゲーム場面においてなかなかパスがつかない、すぐカットされてシュートを狙うまでいけないという課題がある。

そこで本単元では「正確にパスをつないで、ゴールに向かってボールを運びシュートを狙う」ことを目標とする。学習内容としては個人的技能はパスやドリブル、シュート、集団的技能はグループ戦術に主眼をおき、攻撃においてパスをつないでシュートを狙うためにいかに仲間と連携して動くかを考え、目的をもってプレーすることを目指している。本時は 4 ゴールゲームを行い、1 チームつき 2 つのゴールがあるという条件設定の中、空いているゴールへ向かって攻めることを学習課題とする。DF との関係で空いているゴールの方向 (オープンスペース) はどこか、どこに動いたらパスがもらえるのかなど周囲の状況を見て、チームでコミュニケーションとりながらプレーすることを意識させたいと考えている。

そのプレーの様子をお互い観察して自分たちのグループの課題を分析し、得点しやすい場所はどこか、どこへパスを出せばいいのか、ボールを持たない動きとしてどこでパスをもらえばいいのか、などグループで意見を交換しながら学びを深めていきたい。

**題目** 自分たちのゲームで何が起きているかを把握し、「ボールを持たないときの動き」をはじめとしてグループごとの課題解決に取り組む。

### 本時の目標

1. 攻撃において、自分と相手との関係を考えながら、正確にパスをつなぎ、ゴールに向かってボールを運びシュートを狙うことができる。(運動の技能)
2. 課題に対して、気づきや発見を共有し合い、協力して活動することができる。  
(運動についての思考・判断)

3. ゲームにおいて、グループ戦術を活かし、目的をもってプレーすることができる。  
(運動についての思考・判断)

### 本時の評価規準（観点／方法）

1. 攻撃において、自分と相手との関係を考えながら、正確にパスをつなぎ、ゴールに向かってボールを運びシュートを狙うことができる。（運動の技能／活動観察）
2. 課題に対して、グループで気づきや発見を共有し合い、協力して活動することができる。  
(運動についての思考・判断／活動観察・ワークシート)

### 本時の学習指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点
<導入> 出欠点呼 本時の説明 準備運動	○集合 ○本時の学習内容を把握し、課題を確認する ○準備運動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・健康観察・見学生徒への指導</li> <li>・課題の確認ができていますか。</li> </ul>
<展開> グループごとに分かれての活動  4ゴールゲームに向けて攻撃のグループ戦術の確認  4ゴールゲーム  課題の確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ボール操作の確認 パス・シュート</li> <li>○ オープンスペースをつかった攻撃 ・空いているゴール（スペース）に向かって攻めシュートを狙う 2対2 4対2 4対3</li> <li>○ 4ゴールゲーム ・課題を意識しながらゲームに取り組む 4対4</li> <li>○ グループの1人がゲームの観察記録をし自チームのプレーを分析し、グループ戦術の課題の確認を行う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題意識を持って積極的に取り組むことができています。</li> <li>・オープンスペースはどこか、どこに動いたらパスがもらえるかを考えてプレーしようとしているか。</li> <li>・ボールを持っていない人がボールを持っている人に対し声をかけるなどコミュニケーションをとろうとしているか。</li> <li>・ゲームにおいてグループ戦術を意識してプレーをしているか。</li> <li>・課題を意識しながらゲームに取り組んでいるか。</li> <li>・グループで分析ができていますか。</li> <li>・課題化しようとしているか。</li> </ul>
<まとめ> 学習のまとめ  次時の課題の確認 片づけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○本時の学習を振り返る ・グループの課題がどの程度解決されゲームに活かされたか。</li> <li>○次時の課題を確認する</li> <li>○片付け</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気づきを共有できていますか。</li> <li>・本時の目標を達成し、次時のめあてをもつことができたか。</li> </ul>

## 実践上の留意点

### 1. 授業説明

今年度の中学校1年生は男女別修で展開しており、そのなかから中学校1年生女子のサッカーを取り上げた。サッカーの中心的な面白さは、出来るようになったドリブルやパスなどのボール操作を駆使し、シュートを決めたり、仲間と戦術を考えたりすることだと考える。この年代の生徒らに向けて、ゴール型の球技では、ボール操作と空間に走り込むなどの動きによってゴール前での攻防ができるような指導が求められているが、授業を進めていくにあたり、女子に多く見られる課題、とりわけゲーム場面においてパスがつかない、すぐカットされてシュートまでいけないという課題がより明確となった。

そこで本単元では「正確にパスをつないで、ゴールに向かってボールを運びシュートを狙う」ことを目標とし、初めの5時間は個人的技能、6時間目以降では個人的技能の確認から集団的技能（グループ戦術）に主眼を置くこととした。本時はその8時間目となり、仲間と共通の意図を持ち、いかに連携してシュートを狙うか、狙える場所にボールを運べるかを目標とした。

目標へ導く手立てとして、30m×40mのグリッドサイズで4ゴールゲームを展開した。1チームにつき2つのゴールがあるという条件設定で、空いているゴールへ向かって攻めることを学習課題とした。2対2、4対2、4対3、それぞれの場合で、相手ディフェンスとの関係から空いているゴールの方向（オープンスペース）はどこか、どこに動いたらパスがもらえるのかなど周囲の状況を見て、チームでコミュニケーションとりながらプレーできるよう、適宜教師の声かけがあり、生徒らのコミュニケーションも活発に行われていた。

一方、オープンスペースに気づいているがパスの正確性を欠いたのか、そもそもオープンスペースに気づかず前方へボールを蹴り出したただけなのかが、瞬時に生徒から発せられた言葉から拾う必要性も感じられた。また、ボール操作の不安から足下ばかり気にしている生徒も多く、集団的技能を高めるための個人的技能をいかに早く定着させることが出来るかも今後の課題といえる。

### 2. 研究協議より

・中1女子の集団的技能を高める為に、生徒同士が声かけをしやすいような教授の工夫はあるか。との質問があり、できなくても分かったこと、気づいたことを意見交換するなど、関わり合うことを大切にしたい。まずは観察し、具体的に何ができているからすごいのか、を言葉にすることを指導した。サッカーで何を学ばせるか、サッカーを通して中1女子に何を学ばせるかの議論が行われた。

・戦術的に理解することが難しい場面で、手でボールを扱うハンドボールやバスケットボールではなく、さらに戦術理解を難しくする足でボールを操作するサッカーを選んだ意図はなにかを問われ、授業者から、ハンドボールやバスケットボールとの共通点を踏まえた授業展開を可能な限り意識した。フリスビーなどを用いた戦術理解を計画していたが、授業時数

不足により断念したという説明があった。参加者、司会者からはウォーキングサッカーやハンドパスを用いた活動も空間に気づかせる上で有用な展開であることの助言があり、今後授業を計画していくなかで貴重な意見を頂いた。

・授業を通して、何となくできてしまうものではなく、よく考え、できなかった行動をリフレクション出来る時間をつくった。それを共有することで個人ではできないことがあっても集団でできることがあるという気づきに繋がられたとした。